

スポーツ行動の生活体系論的アプローチ

〔I〕

—スポーツ行動のタイプと生活体系
構成要素との関連を中心にして—

The Life-Systematical Study on Sport Behavior — The Relationship between Sport Behavior and Constituent of Life System —

西垣完彦^{*1} 佐藤葉子^{*2} 坪田暢允^{*3} 寺沢 猛^{*4}
中島豊雄^{*5} 藤田匡肖^{*2} 山本英毅^{*6}

Hirohiko NISHIGAKI^{*1}, Yoko SATO^{*2}, Nobumitsu TSUBOTA^{*3}, Takeshi TERASAWA^{*4},
Toyoo NAKASHIMA^{*5}, Masanori FUJITA^{*2}, and Hideki YAMAMOTO^{*6}

The ultimate purpose of this study is to make clear the mechanism which determines sport behavior by using a life systematical approach. This paper aims to get the basic data concerning the association between sport behavior and life system.

The subjects of this investigation were 458 people of over twenty-years old, including male and female, who live in Nabari-city and town of Ago in Mie prefecture. This investigation covered the time period from January to March, 1978.

Firstly, the materials of the sport behavior were classified into five types according to a pattern of sports which is named A-model.

Secondly, these materials were classified into four types according to quantity of sport behavior which is named B-model.

Thirdly, these materials were classified into four types according to the sport discriminatory behavior which is named C-model.

With a verification of the relationship between these models and the constituents of the life system, we found some constituents of the life system which determines sport behavior.

The results are as follows:

1. The sport behavior is controlled by the constituents of the life system.
2. Each of twelve types has their own particular life system.
3. The sport behavior of C-model has the strongest relationship to the constituents of life system in these models. Also A and B-model are of the same degree. However, there are two remarkable differences between A and B-model. It is that A-model is controlled by constituents of family and B-model is controlled by constituents of leisure time.
4. The sport behavior and the constituents of life system develop into an organical system. It is a possibility that the sport behavior will change the life system structurally.

*1 愛知県立芸術大学 *2 三重大学 *3 名古屋学院大学 *4 豊田工業高等専門学校 *5 名古屋大学

*6 日本福祉大学

*1 The Aichi Prefectural University of Fine Arts *2 Mie University *3 Nagoya Gakuin University

*4 Toyota Technical College *5 Nagoya University *6 Japan Social Welfare College

はじめに

スポーツ行動は生活行動の1つであり、よりよく生きるという目的に向かって展開される目的志向的に強く意味づけられた行動である。したがって、スポーツ行動の多くは単発的な行動として発現するのではなく、いくつかの側面の動機づけ、たとえば、健康・体力の維持・増進、ストレスの解消、楽しみの追求などのエネルギーを起動力として、諸々の生活条件に規制されながら発現・存続し、同時にそれは他の種々様々の生活行動と有機的に関連しあって1つのシステムを形成している。

すなわち、あるスポーツ行動が成立するのは、行動者の生活にその行動を成立させるための諸々の主体的・客体的条件が具備していることを意味する。たとえば、野球をするというスポーツ行動を考えてみると、野球が好きだとか技能をもちているとかいった主体的条件とともに、仲間、場所、時間、用具といった客体的条件が最低限充足されていないことにはその行動は成立しない。しかも、こうした客体的・主体的条件は、行動者の生活体系のなかで相互関連的に規定しあっている。たとえば、余暇時間は職場地点、職種、職場での地位・役割などによっても規制されている。このことは、生活体系を構成する要素とスポーツ行動の質と量が相互関連的であることを意味する。つまり、Aというスポーツ行動にはA'という生活体系の存在が必要であり、B'という生活体系にはBというスポーツ行動が成立しやういことを意味する。

ところで、今日までわが国でなされているスポーツ行動に関する研究のうち、実証的なものとしては、荒井ら^{1,2,4}、東川ら^{3,5}、永吉ら⁶、池田ら⁷、嘉戸⁸等の研究がある。荒井ら、東川らは、スポーツ行動モデルを行為理論にもとづいて作成し、人間と諸々のスポーツ行動の関わり方について実証的な分析を試みている。また、永吉ら、池田らは多変量解析手法である林の数量化理論を適用して、スポーツの実施・非実施に寄与している要因のウェイトの大きさや方向からスポーツ行動成立に関与する要因の分析を試みている。さらに、嘉戸は「生活程度」「ひま」「学校時代の運動クラブ経験」などから8つの多元クロスタイプをつく

り、各タイプのスポーツ実施程度を分析しスポーツ行動の規定要因を構造的に把握している。その他、スポーツ行動という用語は使用していないが類似のものとしては小椋ら⁹の労働との関連から勤労者のスポーツ行動を分析したものや、丹羽らの女子大生のスポーツ参加を決定する要因を分析したもの等の研究をあげることができる。一方、山本¹¹、多々納¹²はスポーツ行動の分析概念について、また、山市¹³はスポーツ行動の認識方法について、いずれも理論的検討を展開している。

これらの先行研究は、スポーツ行動を多角的に究明する上で独自の価値をもっているが、その多くはスポーツ行動成立の要因に関する領域のなかでも、もっぱらスポーツの「実施」「非実施」を規定する要因分析に力点が置かれ、スポーツ行動の質と量を規定する要因分析にはいたっていない。また、スポーツ行動を生活構造の文脈の中で総合的に分析・検討したものは皆無に近く、種々様々のスポーツ行動が成立するための生活体系を具体的かつ体系的に解明するまでにいたっていない。

生活体系は、不変的固定的なものではなく、流動的可変的なものであるから、個々人のスポーツ行動の形態や様態が、その生活体系を変革し、再構成する場合があるが、また逆に、個々人の生活体系が、そのスポーツ行動の質や量を決定することも考えられる。ところで、現在では前者の状況は一般的でなく、むしろ後者、すなわち、個々人の生活体系がそれぞれに対応したスポーツ行動の質や量を選択する基準として決定的に作用しているとみてよい。ここにスポーツ行動成立のメカニズムを、生活体系論の視点からアプローチしようとする意義が見出されるのである。

本研究は、スポーツ行動を成立させているメカニズムを生活体系論の立場から解明しようとするものであるが、小稿では、スポーツ行動のレベル^{注1)}と生活体系構成要素との関連を分析し、スポーツ行動を規制する要因がスポーツ行動のレベルによって異なるかどうかを検証するとともに、スポーツ行動のタイプ別の生活体系を仮説的ではあるが提示したい。

研究の方法

1. 分析の枠組みと調査項目の選定

生活体系は「個人または家族の生活行動とそれを規制している生活諸条件とのシステム¹⁴⁾」であるから、スポーツ行動を成立させるに必要な生活を明らかにするための理論的枠組みと、スポーツ行動を規制する諸要因が何であるかを仮説的に決定しなければならない。そこで、分析の理論的枠組みとしては、青井の行為分析の枠組み¹⁵⁾を手がかりとした。それは、青井モデルが「分析の中心を生活体系の構造的側面におき、生活行動を枠づけ、規制している生活の構造的要因を、外的規制要素と内的規制要素に区分し、内的規制要素を生活行動を内側から形成し、固定化させると同時に、時には主体的に変容せしめる力としてとらえている¹⁶⁾」という点でスポーツ行動の分析に適切であると考えたからである。具体的な調査項目については、スポーツ行動に関するいくつかの先行研究と面接聴取調査の結果にもとづいて選定した。その結果、

表1 (類型I) スポーツ行動のパターンによるタイプ分け

- ① 日常型……自主的に週1回以上年間に1~2種目のスポーツを継続的に実施しているもの。但し、月2~3回程度でもクラブに加入して定期的に活動しているものはこの型に含める。
- ② 季節型……主に季節の種目(スキー、スケート、水泳、キャンプ等)を年間10日以上活動しているもの。また、季節型スポーツでなくても特定の時期にだけスポーツを行うものは、この型に含める。
- ③ 誘発型……季節に関係なく機会があればスポーツをするもの、行事依存型でもないが、他人(同僚、近隣の人、家族等)を誘ったり、又誘われたりしてスポーツ活動を実施しているもの。
- ④ 行事型……主に①~③以外で地域や職場の行事でスポーツ活動を行っているもの。活動の3%以上が行事スポーツの場合はこの型に含む。
- ⑤ 散発型……年間のスポーツ活動の総日数が月1~2回程度以下で、特定の種目に限らないもの。

項目は表4に示したものを含めて84となった。それぞれの項目は、環境、状況枠、物財体系、社会体系、文化体系、生活行為、パーソナリティ体系に分けられている^{注2)}。

2. スポーツ行動類型化の方法と内容

小稿の目的の1つは、種々様々のスポーツ行動と生活体系構成要素との関連を分析することである。そこで、スポーツ行動のレベルを以下の3つの角度から分類し、それぞれの類型ごとに4~5のスポーツ行動のタイプをつくった。

1) 類型I。これは「スポーツ行動のパターン」による分類で、スポーツ行動を特徴づけるスポーツ種目、実施頻度、時期、場所(施設)、仲間などから、表1に示すような基準にもとづいて総合的にスポーツ行動をパターン化したもので、日常型、季節型、誘発型、行事型、散発型の5つのカテゴリーに分けた。

2) 類型II。これは「スポーツ行動の量(頻度)」による分類で、行動の内容(質)は一切考慮せずスポーツの実施頻度を基準に以下のA, B, C, D型の4つのカテゴリーに分けた

表2 (類型II) スポーツ行動の量によるタイプ分け

- A型: 平均週2回以上スポーツを実施したもの。
- B型: 平均週1回スポーツを実施したもの。
- C型: 平均月2~3回程度スポーツを実施したもの。
- D型: 平均月1回か、それ以下スポーツを実施したもの。

3) 類型III。これは「スポーツ行動の選好傾向」による分類で、総理府の世論調査に用いられたスポーツ活動の分類に準拠し、おもにどのようなスポーツを選択、愛好、実施したかを基準に、4つのカテゴリーに分けた。なお、この分類ではスポーツ行動の頻度が月1回以下のデータを分析対象から除外した。^{注3)}

図 1. スポーツ行動の分析および類型化の手順と標本数

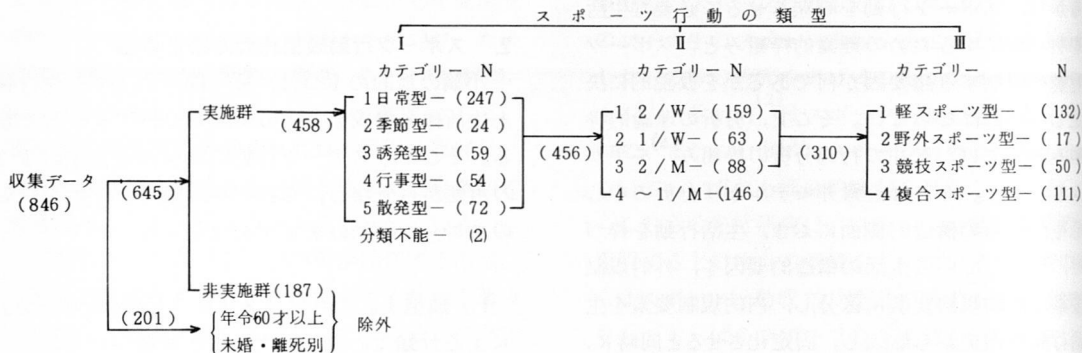


表 3 (類型Ⅲ) スポーツ行動の選好によるタイプ分け

① 軽スポーツ型
② 野外スポーツ型
③ 競技スポーツ型
④ 複合スポーツ型 (①～③の混合)

3. 調査の方法

三重県下の5市町村(名張市, 阿児町, 志摩町, 阿山町, 三雲村)在住の20才以上の男女約5000人を対象に郵送質問紙法調査を実施した。ただし, 小稿の分析対象となった標本は, 名張市, 阿児町のものである。なお対象者の抽出にあたっては, 住民票を原簿にした等間隔抽出法を採用した。調査の時期は昭和53年1月～2月である。

4. データの整理と分析方法

1) データ

収集した標本を予備分析した結果, 今回は「年令」「結婚」の2項目について統制を行い, 年令60才以上および未婚者, 離死別者のデータ201を除外した。さらに, 小稿の目的からスポーツ非実施者187をも除外した^{注4)}。その結果, 分析の対象となったデータは最終的には過去1年間になんらかのスポーツを実施したものの標本458である。

2) 分析の方法

スポーツ行動のレベル^{注5)}と生活体系構成要素との関連性の検定をカイ自乗検定で行い, 危険率5%水準以下のものを関連性ありとみなし, その関連度の強弱をみるためにクラマーの関連係数を算出した。ただし, クラマー係数はオーダーの関係で平方根で示した¹⁷⁾。データの分析およびスポーツ行動類型化の手順とタイプ別の標本数は図1に示すとおりである。

調査の結果

スポーツ行動の類型(I, II, III)ごとに, スポーツ行動のタイプと生活体系構成要素(項目)との関連性を X^2 検定で行い, 危険率5%水準で有意差のある項目についてクラマー関連係数を算出した。結果は表4に示すとおりである。

以下, 各類型別に結果を概観する。

1 類型I「スポーツ行動のパターン」と生活体系構成要素との関連

・状況枠項目との関連

さまざまなスポーツ行動がどのような状況下で成立しているかを生活時間や生活空間などからみると, スポーツ行動のパターンは「休日の余暇満足度」「スポーツ施設の利用」の2項目と関連し

Table 4. The Relationship between Sport Behavior and Constituent of Life System

		Model of Sport Behavior											
		I. Pattern of Behavior			II. Quantity of Behavior			III. Discriminatory Behavior					
		X ² -Test	√Cr	Table No.	X ² -Test	√Cr	Table No.	X ² -Test	√Cr	Table No.			
Environment	Sport facility which people can use freely		—	—	—	—	—	—	*	0.164	III-26		
	Kinds of Sport Facility		—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	Community Awareness of House wife's Sport Participation		*	0.138	I-20	*	0.124	II-22	—	—	—		
	Family Awareness of House wife's Sport Participation		—	—	—	—	—	—	—	—	—		
System	Circumstantial Plane	Leisure Time of Weekday	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Leisure Time Zone of Weekday	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Leisure Time of Holiday	—	—	—	*	0.130	II-1	**	0.192	III-1		
		Leisure Time Zone of Holiday	—	—	—	*	0.118	II-2	—	—	—		
		Degree of Satisfaction in Leisure Time of Weekday	—	—	—	—	—	—	**	0.173	III-2		
		Degree of Satisfaction in Leisure Time of Holiday	*	0.126	I-1	*	0.138	II-3	—	—	—		
		Work Setting	—	—	—	—	—	—	**	0.237	III-3		
		Commuter Time	—	—	—	—	—	—	**	0.214	III-4		
		Utilization of Sport Facility	**	0.232	I-2	**	0.202	II-4	**	0.301	III-5		
		Participation in Local Sport Event	—	—	—	*	0.155	II-5	**	0.251	III-6		
System	Financial System	Sport Consumption	**	0.232	I-9	**	0.281	II-12	**	0.393	III-13		
		Intention of Income	—	—	—	—	—	—	**	0.204	III-14		
		Satisfaction of Income	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Comfortableness in Residence	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Possession of Car	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
System	Social System	Type of Family (I)	**	0.148	I-10	—	—	—	—	—	—		
		Type of Family (II)	**	0.201	I-11	—	—	—	—	—	—		
		Content of Work	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Human Relationship at Place of Work	—	—	—	—	—	—	*	0.167	III-15		
		Responsibility of Work	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Busyness of Work	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Work Fatigue	—	—	—	—	—	—	**	0.213	III-16		
		Mental Fatigue	—	—	—	—	—	—	*	0.154	III-17		
		Physical Fatigue	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Chance of Demonstration of Ability in Work	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Sport Club Experience After Graduated	**	0.214	I-12	**	0.212	II-13	**	0.346	III-18		
		Life	Cultural System	Consideration to Health	—	—	—	**	0.318	II-14	**	0.188	III-19
				Concerned about Health	**	0.167	I-13	**	0.161	II-15	**	0.224	III-20
				Contact of Sport Information in Mass-Media	—	—	—	—	—	—	—	—	—
				I. Newspaper	*	0.138	I-14	**	0.128	II-16	**	0.172	III-21
II. Television	**			0.148	I-15	**	0.130	II-17	—	—	—		
III. Municipal Gazette	**			0.141	I-16	*	0.177	II-18	*	0.141	III-22		
Topic of Sport (with Family)	**			0.141	I-17	**	0.143	II-19	—	—	—		
Topic of Sport (with Colleague and Neighbor)	*			0.138	I-18	**	0.128	II-20	**	0.182	III-23		
Recognition of Holding to Local Sport Event	**			0.211	I-19	*	0.161	II-21	—	—	—		
Recognition of Content to Local Sport Event	—			—	—	—	—	—	**	0.202	III-24		
Life	Cultural System	Effect of Sport Event (National Competition)	—	—	—	—	—	—	—	—			
		I. Interest	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
Life	Cultural System	II. Motivation	—	—	—	—	—	*	0.160	III-25			
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
Living Behavior	A-model Pattern of Behavior	Sport Behavior	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
Living Behavior	B-model Quantity of Behavior	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
Living Behavior	C-model Discriminatory Behavior	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
System	Personality System	Age	*	0.138	I-3	*	0.118	II-6	**	0.195	III-7		
		Sex	—	—	—	—	—	—	**	0.350	III-8		
		School Career	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Profession (Person in question)	—	—	—	—	—	—	**	0.183	III-9		
		Profession (husband)	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Liking of Sport (I)	*	0.171	I-4	*	0.146	II-7	**	0.224	III-10		
		Liking of Sport (II)	—	—	—	*	0.141	II-8	**	0.258	III-11		
		Sport Effect	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		I. Health, Physical Fitness	**	0.173	I-5	**	0.159	II-9	—	—	—		
		II. Community	*	0.138	I-6	—	—	—	—	—	—		
		III. Rearing of the Youth	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		IV. Good Use of Leisure	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		V. Will-Power of Life	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Attitude toward Sport Value	*	0.138	I-7	**	0.139	II-10	—	—	—		
		Experience of Sport Club in School	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Volition of Participation in Physical Education Lesson	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Physical Fitness	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Lack of Exercise	—	—	—	—	—	*	0.140	II-11	*	0.181	III-12
		Work and Leisure	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		Income or Leisure	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
Satisfaction in Work	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
Satisfaction in Living	**	0.148	I-8	—	—	—	—	—	—				
Class Identification	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
Aim of Life	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
Life Worth Living	—	—	—	—	—	—	—	—	—				

note *—P < 0.05

**—P < 0.01

類型 I スポーツ行動のパターン

N	表 I-1 休日の余暇満足度					表 I-2 スポーツ施設の利用					表 I-3 年 令				表 I-4 スポーツの愛好 (1)		表 I-5 スポーツの効果に対する態度					表 I-6 スポーツの価値観 (0~10点)		
	十 分	ま あ ま	少 し 足 り な い	全 く 不 十 分	ど ち ら と も い え な い	利 用			利 用 せ ず	※ (N)	20 代	30 代	40 代	50 代	す き き	す き で も き ら い で も な い ①	健康・体力 づくり			町 づ くり		好 意 的 (9 と 10)	中 間 的 (7 と 8)	
						1 と 4 回	5 と 9 回	10 回 以 上									役 立 つ と 思 う	思 ど ち ら と も い え な い ②	役 立 つ と 思 う	思 わ な い	ど ち ら と も い え な い			
日常型	247	33	39	13	9	5	18	14	36	31	(202)	12	45	26	17	90	9	98	2	86	4	10	80	16
季節型	24	17	50	13	17	4	30	10	20	40	(20)	25	46	21	8	88	13	96	-	92	4	-	75	13
誘発型	59	24	34	19	17	2	50	4	9	37	(46)	12	46	31	12	86	14	92	9	83	3	14	78	12
行事型	54	15	37	26	9	2	47	8	24	21	(38)	9	39	39	13	82	17	94	6	82	4	13	70	24
散発型	72	30	27	19	7	8	38	5	5	52	(56)	26	28	43	39	74	25	89	11	69	7	25	64	21
計	456	28.5	36.8	15.6	8.8	4.2	29.0	10.5	25.7	34.8	(362)	13.6	40.8	28.3	17.3	86.2	13.2	95.2	4.6	82.5	4.4	12.5	75.7	17.1

注 1. 表中 NA, DK を除いてあるので、100 にならないものがある。
 2. ※の N は NA を除くものである。(以下、同じ)

N	表 I-8 生活満足度					表 I-9 スポーツ消費		表 I-10 家族型 (I)				表 I-11 家族型 (II) - 女性 -				表 I-12 学校卒業後のスポーツクラブ入			表 I-13 健康法					
	非 常 に 満 足	ま あ ま 満 足	少 し 不 満	非 常 に 不 満	な ん と も い え な い	支 出 あ り	支 出 な し	核 家 族		複 合 家 族		子 な し	核 家 族		複 合 家 族		現 在 加 入	過 去 加 入	未 加 入	栄 養 食 事	睡 眠 休 養	ス ポ ー ツ 運 動		
								子 子	子 子	若 夫 婦 に 子 な し	若 夫 婦 に 子 あ り		末 子 小 学 入 学 前	末 子 小 学 以 上	末 子 小 学 入 学 前	末 子 小 学 以 上								
日常型	247	5	71	15	-	7	72	25	5	53	2	39	6	11	48	9	25	(106)	26	11	49	35	41	24
季節型	24	8	63	21	-	8	67	33	4	42	8	46	18	18	27	9	27	(11)	8	8	75	31	46	23
誘発型	59	12	53	29	5	2	53	39	3	53	3	41	4	7	48	11	30	(27)	2	14	70	42	51	7
行事型	54	-	63	28	-	9	54	44	6	22	-	70	4	-	22	15	59	(27)	9	9	70	36	56	8
散発型	72	15	56	16	4	8	44	51	10	48	4	36	25	7	46	7	14	(28)	7	7	60	36	60	4
計	456	7.0	65.0	19.0	1.5	7.2	62.5	33.6	5.7	48.1	2.4	42.9	9.0	9.0	43.2	10.1	28.6	(199)	17.1	10.5	57.7	35.9	46.7	17.4

N	表 I-14 マス・メディアのスポーツ情報との接触												表 I-15 スポーツの話題						表 I-16 地域スポーツ行事開催の認知				表 I-17 主婦の参加理解		
	新 聞				T V				市 町 公 報				家 族 と			同 僚 や 近 隣 と			開 催 認 知	開 催 認 知	わ かり	あ る			
	い つ も 読 む	と き ど き	は と ん ど き	全 く 読 ま な い	い つ も み る	と き ど き	は と ん ど き	全 く み な い	い つ も 読 む	と き ど き	は と ん ど き	全 く 読 ま な い	い つ も す る	と き ど き	は と ん ど き	全 く し な い	い つ も す る	と き ど き						は と ん ど き	全 く し な い
日常型	247	46	48	5	1	45	52	1	1	43	49	7	2	29	63	7	-	23	62	13	2	84	5	8	87
季節型	24	21	71	8	-	8	88	4	-	17	67	17	-	8	79	13	-	4	67	21	4	71	4	17	83
誘発型	59	36	54	9	2	39	59	-	-	31	61	7	-	19	66	10	3	15	66	14	3	71	7	14	73
行事型	54	32	50	19	-	28	65	6	-	35	56	9	-	19	59	20	-	20	65	11	4	87	4	7	82
散発型	72	36	45	16	3	29	63	7	7	21	60	14	6	15	67	14	4	14	51	23	11	62	26	8	70
計	456	40.0	49.7	9.0	1.2	38.1	58.4	2.6	0.9	35.5	53.9	8.8	1.8	23.0	64.3	10.5	1.3	19.0	61.1	14.7	3.9	81.9	8.5	9.6	81.6

休日の余暇満足度は日常型、季節型に高く、誘発型、行事型に低い(表I-1)。また、スポーツ施設の利用者は行事型に多く、散発型に少ない。ただ、利用回数の点では日常型がもっとも多く、3人に1人は年間10回以上利用している(表I-2)。しかし、「平日や休日の余暇時間」「時間帯」「職場地点」「通勤時間」などの項目とは関連しない。

・内的規制要素(項目)との関連

まず、社会的属性に関する項目からみると、「年齢」とのみ関連し、日常型、誘発型は30代、秀節型は20・30代、行事型は40代、散発型は40・50代がいずれも多い傾向にある(表I-3)。しかし、「性」「学歴」「職業」「学校時代のスポーツクラブ経験」とは関連しない。つぎに、意識項目では「スポーツの愛好(I)」「スポーツの価値態度」「生活満足度」と関連し、スポーツが好きというものは、日常型がもっとも多く散発型がもっとも少ない。とくに散発型の4分の1は、スポーツが「すきでもきらいでもない・きらい」である(表I-4)。「スポーツの効果に対する態度」では、「健康・体力づくり」や「町づくり」の項目において、また「スポーツの価値態度」では、いずれも散発型が他の型に比して好意的反応を示すものが少ない(表I-5, 6, 7)。さらに「生活満足度」では誘発型、行事型に不満をもつものが多い(表I-8)。しかし、「体力充実感」「運動不足感」「学校時代の体育授業参加意欲」「仕事と余暇」「階層帰属意識」などの項目とは関連しない。

・外的規制要素(項目)との関連

つぎに、スポーツ行動の客体的条件である外的規制要素についてみると、物財体系の項目では「スポーツ消費」とのみ関連し、スポーツの用具購入や施設入場料などに支出したものは、日常型に多く散発型に少ない(表I-9)。

社会体系の項目では、「家族型(I)・(II)」 「学校卒業後のスポーツクラブ加入」の2つに関連がみられる。まず、「家族型(I)」の「子どもあり」をみると、日常型、誘発型、散発型では核家族の方が複合家族の方よりも多いのに対し、季節型、行事型では逆に複合家族の方が多くなっている。また、「子どもなし」は、季節型、散発型に多

い。さらに、女性だけについてみると、「複合家族で末子が小学生以上の婦人」では行事型がきわめて多い(表I-10, 11)。「学校卒業後のスポーツクラブ加入」では、現在加入しているものは、日常型の26%がもっとも多く、他はいずれも10%に満たない(表I-12)。その他、「仕事の内容」「仕事の責任」「職場の人間関係」など職業に関する項目とはすべて関連しない。

文化体系の項目では、健康・体力を維持・増進するための「健康法」と関連し、スポーツや運動を健康法の第一としているものは日常型、季節型に多い(表I-13)。しかし、日頃の「健康・体力への配慮」とは関連しない。また、「マス・メディアのスポーツ情報との接触」についてみると、「新聞」「テレビ」「市町公報」のいずれとも関連し、これらのメディアのスポーツ情報にいつも接触しているものは、日常型にもっとも多く季節型に少ない(表I-14, 15, 16)。さらに、家族や同僚や近隣の人びととの「スポーツの話題」の交換でもマス・メディアの場合と同傾向を示し、スポーツの話題をいつもする人は日常型に多く季節型に少ない(表I-17, 18)。また、「地域スポーツ行事開催の認知」についてみると、認知度は行事型、日常型に高く散発型に低い。とくに散発型では、調査対象地のいずれもが年間かなり多くのスポーツ行事を開催しているのにもかかわらず4人に1人が「開かれていない」としている(表I-19)。

・環境項目との関連

「主婦のスポーツ参加に対する理解I(家族)」が関連し、理解があるとするものは日常型、季節型、行事型に多く、誘発型、散発型に少ない(表I-20)。しかし、「主婦のスポーツ参加に対する理解II(地域)」や物的な環境条件である「気軽に利用できるスポーツ施設」や「スポーツ施設の種類」とは関連しない。

2 類型II「スポーツ行動の量(頻度)」と生活体系構成要素との関連

ここでは便宜上、平均週2回以上スポーツを実施したものを「A型」、平均週1回程度を「B型」、平均月2~3回程度を「C型」、平均月1回以下

を「D型」とよぶことにする。

・状況枠項目との関連

スポーツの実施頻度がどのような状況下で規制されているかを生活時間や生活空間などからみると、スポーツ行動の量は「休日の余暇時間」「休日の余暇時間帯」「平日の余暇満足度」「職場地点」「スポーツ施設の利用」「地域スポーツ行事参加」の5項目と関連し、休日の余暇時間が4時間以上のものはA>C>B>D型の順であり、とくにD型には少ない(表II-1)。時間帯としてはA型の「午後」を除いてB, C, D型のいずれも「一定しない」とするものが多い(表II-2)。また、平日の余暇満足度はA>C=B>D型の順で、D型の3分の1は余暇時間の現状に不満を示している(表II-3)。さらに、地域のスポーツ施設の利用者はB>C=A>D型であるが、利用回数では10回以上利用者はA>B>C>D型の順である(表II-4)。また、地域のスポーツ行事参加率はC>B>A>D型の順になっている(表II-5)。その他「平日の余暇時間とその時間帯」「平日の余暇満足度」「職場地点」「通勤時間」などの項目とは関連しない。

・内的規制要素(項目)との関連

まず、社会的属性に関する項目についてみると、類型Iと同様「年齢」とのみ関連し、B・C型は30代、D型は50代が多い。しかし、A型は比較的各年齢層に平均的に分散している(表II-6)。その他、「性」「学歴」「職業」「学校のスポーツクラブ経験」などの項目とは関連しない。つぎに意識項目では、「スポーツの愛好(I)(II)」「スポーツの価値態度」「運動不足感」と関連し、スポーツが好きというものはA型に多くD型に少ない。スポーツの実施頻度と愛好度は比例し、頻度が低下するにつれて愛好の程度も低下している(表II-7)。また、スポーツを「する」方が好きはA型に多く、「みる」方が好きはD型に、「する」のも「みる」のも好きはB型に多い(表II-8)。スポーツに対する態度についてみると、スポーツの健康・体力づくりの効果に対する態度ならびに価値態度が好意的であるものはB型に多くD型に少ない(表II-9, 10)。また、運動不足を感じるものはD, C型

に多くA, B型に少ない。全体として、スポーツ実施の頻度が減少するにつれて運動不足を感じるものの数が多くなっている(表II-11)。その他「体力充実感」「学校時代の体育授業参加意欲」「仕事と余暇」「階層帰属意識」などの項目とは関連しない。

・外的規制要素(項目)との関連

まず物財体系の項目では、類型Iと同様「スポーツ消費」とのみ関連し、スポーツの用具購入や施設入場料などに支出したものは、A, B, C型に多くD型に少ない(表II-12)。その他「スポーツのための収入指向」「収入満足度」あるいは「住居安息度」「自家用車の所有」などの項目とは関連しない。

社会体系の項目では、「学校卒業後のスポーツクラブ加入」とのみ関連し、スポーツ実施頻度の減少に比例してクラブ加入者が減少する(表II-13)。一方、類型Iで関連性がみられた「家族型I・II」とは関連しない。また「仕事の内容」「仕事の責任」「職場の人間関係」など職業に関する項目ともすべて関連しない。

文化体系の項目では、類型Iでは関連がみられなかった「健康・体力への配慮」と関連し、健康・体力に常に注意を払っているものはA, B型に多くC, D型に少ない(表II-14)。さらに「健康法」とも関連し、A, C, D型は睡眠・休養指向、B型は栄養・食事指向である。健康法として第1にスポーツをあげるものはA>B>C>D型の順、つまり、スポーツ実施の頻度と比例する(表II-15)。また、スポーツ実施の頻度は新聞、テレビ、市町公報などの「マス・メディアのスポーツ情報の接触」とも関連している。すなわち、いつもスポーツ情報に接しているものは、新聞ではB>A=C>D型、テレビではB>C=A>D型、公報ではA>B=C>D型であり、D型はいずれのメディアとも接触度が低い(表II-16, 17, 18)。さらに、「家族や同僚や近隣の人びととのスポーツの話題」とも関連し、いつもスポーツの話をするこたえた人のなかでは、「家族」の場合はB>A>D=C型、「同僚や近隣」の場合はA=C=B>D型の順であり、マス・メディアの場合と同様D型が低

類型Ⅱ スポーツ行動の量

表Ⅱ-1

表Ⅱ-2

表Ⅱ-3

表Ⅱ-4

表Ⅱ-5

N	休日の余暇時間					休日の余暇時間帯				休日の余暇満足度					スポーツ施設の利用				地域スポーツ行事参加				
	1 時 間	2 時 間	3 時 間	4 時 間	5 時 間 以上	午 前	午 後	夜 間	一 定 し な い	十 分	ま あ ま あ	少 し 足 り な い	全 く 不 十 分	ど ち ら と も い え な い	利用			※ (N)	参 加	不 参 加	※ (N)		
															1 回	5 回	10 回 以上						
A型週2回以上	159	15	17	16	20	28	4	37	21	32	37	40	11	8	3	15	12	39	34	(120)	38	61	(131)
B型週1回以上	63	18	18	19	11	25	5	35	16	38	25	38	19	3	6	31	13	33	24	(55)	42	51	(55)
C型月2~3回程度	88	16	21	16	13	28	11	26	21	35	28	36	15	6	7	30	16	23	31	(70)	49	49	(73)
D型月1~2回程度	146	25	16	23	15	12	2	27	28	33	21	34	20	14	3	43	4	10	43	(113)	28	69	(99)
計	456	18.6	17.3	18.6	15.6	22.8	4.8	31.4	22.6	33.8	28.5	36.8	15.6	8.8	4.2	29.0	10.5	25.7	34.8	(362)	38.3	59.2	(358)

表Ⅱ-6

表Ⅱ-7

表Ⅱ-8

表Ⅱ-9

表Ⅱ-10

表Ⅱ-11

表Ⅱ-12

N	年令				スポーツの愛好(Ⅰ)		スポーツの愛好(Ⅱ)				スポーツの効果に対する態度(健康・体力づくり)		スポーツの価値態度(0~10点)			運動不足感		スポーツ消費		
	20 代	30 代	40 代	50 代	す き	き ら	す る 方 が す き	み る 方 が す き	両 方 が す き	※ (N)	役 立 つ と 思 う	思 ど ち ら と も い え な い	好 意 的 (9 と 10)	中 間 的 (7 と 8)	非 好 意 的 (0 と 6)	あ り	な し	支 出 あ り	支 出 な し	
																				あ り
A型週2回以上	159	10	43	28	20	93	8	36	16	48	(147)	98	3	76	18	6	59	40	72	26
B型週1回以上	63	14	51	22	13	86	11	13	15	70	(54)	100	-	67	13	-	62	33	68	25
C型月2~3回程度	88	14	48	31	8	86	14	25	12	63	(76)	96	3	81	16	2	72	25	74	22
D型月1~2回程度	146	17	30	30	23	80	19	23	20	57	(116)	91	9	69	19	12	70	25	43	51
計	456	13.6	40.8	28.3	17.3	86.2	13.2	27.0	16.0	56.7	(393)	95.2	4.6	75.7	17.1	6.8	65.4	31.1	62.5	33.6

表Ⅱ-13

表Ⅱ-14

表Ⅱ-15

表Ⅱ-16

表Ⅱ-17

表Ⅱ-18

N	学校卒業後のスポーツクラブ加入			健康・体力への配慮			健康法				マス・メディアのスポーツ情報との接触												
	現 在 加 入	過 去 加 入	未 加 入	常 に 注 意	と き ど き 全 く な い	あ ま ら り て い な い	栄 養 事	睡 眠 休 養	ス ポ ー ツ 運 動	※ (N)	新 聞		T V		市 町 公 報								
											い つ も 読 む	と き ど き も な い	い つ も み る	と き ど き も な い	い つ も 読 む	と き ど き も な い	い つ も 読 む	と き ど き も な い					
A型週2回以上	159	26	13	47	35	52	13	32	41	27	(131)	45	48	6	2	42	55	1	2	45	47	6	2
B型週1回以上	63	24	10	57	32	44	24	42	40	19	(48)	52	46	2	-	51	48	2	-	37	56	6	2
C型月2~3回程度	88	17	15	53	18	53	28	36	52	12	(58)	43	44	11	1	44	53	2	-	36	53	9	-
D型月1~2回程度	146	5	6	72	23	50	25	38	55	7	(97)	28	57	14	1	25	69	5	1	24	61	12	3
計	456	17.1	10.5	57.7	27.6	50.7	21.3	35.9	46.7	17.4	(334)	40.0	49.7	9.0	1.2	38.1	58.4	2.6	0.9	35.5	53.9	8.8	1.8

表II-19 表II-20 表II-21 表II-22

	ス ポ ー ツ の 話 題												地域スポーツ行事 開催の認知		主婦のスポーツ 参加に対する 理解I(家族)	
	家 族 と				同 僚 や 近 隣 と				開 か れ て い る	開 か れ て い ない	わ か ら な い	あ る 方	な い 方	わ か ら な い		
	い つ も す る	と き ど き	ほ と ん ど	全 く し な い	い つ も す る	と き ど き	ほ と ん ど	全 く し な い								
A型週 2 回以上	159	29	62	8	—	23	62	12	3	82	5	8	86	8	4	
B型週 1 回以上	63	33	57	8	2	21	62	16	2	87	3	10	87	5	6	
C型週 2~3 回程度	88	15	75	7	—	23	66	7	2	83	3	9	85	7	7	
D型週 1~2 回程度	146	17	63	16	3	12	57	21	8	68	16	10	72	12	13	
計	456	23.0	64.3	10.5	1.3	19.0	61.1	14.7	3.9	81.9	8.5	9.6	81.6	8.8	8.1	

い(表II-19, 20)。また、地域のスポーツ行事の認知についてみると「地域スポーツ行事開催の認知度」は、A, B, C型に高く、D型に低い(表II-21)。しかし、「スポーツ行事の具体的内容」の認知の高低とは関連しない。

・環境項目との関連

類型Iの場合と同様、「主婦のスポーツ参加に対する理解I(家族)」が関連し、家族の理解は、A, B, C型に高くD型に低い(表II-22)。しかし、「主婦のスポーツ参加に対する理解II(地域)」や物的な環境条件である「気軽に利用できるスポーツ施設」「スポーツ施設の種類」とはいずれも関連しない。

3. 分類III「スポーツ行動の選好傾向」と生活体系構成要素との関連

ここでは、個々人の参加スポーツ種目の特徴によってスポーツ行動を、軽スポーツ型、野外スポーツ型、競技スポーツ型、複合スポーツ型の4つのタイプに分けた。なお、ここでは前述したようにスポーツ実施が月2~3回以上のものだけについてタイプ分けした。

・状況枠項目との関連

さまざまなスポーツ行動への指向が、どのような状況下で発現しているかを生活時間や生活空間などからみると、スポーツ選好は、「休日の余暇時間」「平日の余暇満足度」「職場地点」「通勤時間

「スポーツ施設の利用」「地域スポーツ行事参加」の6項目と関連がみられる。とくに、休日の余暇時間が4時間以上のカテゴリーにおいては顕著な傾向がみられ、複合>野外>軽>競技スポーツ型の順となっている(表III-1)。また、「平日の余暇満足度」は、野外=軽>複合>競技スポーツ型の順である(表III-2)。

職場の所在地についてみると、職場が居住地内にあるものは、軽、競技スポーツ型を、職場が居住地外にあるものは野外、複合スポーツ型のスポーツを選好する傾向がみられる。したがって、通勤時間の短いものは軽、競技スポーツ型、長いものは野外、複合型のスポーツ行動をとる傾向がうかがわれる(表III-3, 4)。さらに、「スポーツ施設の利用では、競技>複合>軽=野外型の順になっており、とくに競技スポーツ型はほぼ全員が利用している。また、利用回数の点でも同傾向を示している。一方、「地域スポーツ行事参加」も施設の利用状況と同傾向を示し、競技>複合>軽>野外スポーツの順に多くなっている(表III-5, 6)。「平日の余暇時間」「時間帯」は類型I, II同様関連がみられない。

・内的規制要素(項目)との関連

まず、社会的属性に関する項目についてみると類型I, IIと同様に「年齢」との関連が強いこと、また、類型I, IIでは関連がみられなかった「性」「職業」とも関連していることが注目される。すな

類型Ⅲ スポーツ行動の選好

表Ⅲ-1

表Ⅲ-2

表Ⅲ-3

表Ⅲ-4

表Ⅲ-5

表Ⅲ-6

N	休日の余暇時間					平日の余暇満足度					職場地点			通勤時間				スポーツ施設の利用				地域スポーツ行事参加				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	居	居	※	1	2	60	※	利	用	利	※	参	不	※		
	時	時	時	時	時	分	分	分	分	分	住	住	(N)	分	分	分	(N)	1	5	10	※	加	加	(N)		
軽スポーツ型	132	18	19	19	15	20	27	36	18	9	5	77	23	(94)	68	4	14	(94)	19	10	15	56	(103)	30	67	(106)
陸上スポーツ型	17	6	35	12	24	18	29	35	12	24	-	40	60	(15)	33	27	40	(15)	22	22	-	56	(9)	21	57	(14)
球技スポーツ型	50	30	16	18	8	22	10	38	24	14	10	71	29	(42)	74	7	14	(42)	21	21	55	2	(47)	63	38	(48)
総合スポーツ型	111	7	15	14	19	41	18	37	34	10	-	56	44	(102)	61	4	31	(102)	28	12	46	14	(90)	49	51	(92)
計	310	15.5	18.1	16.8	15.8	27.7	21.0	36.5	24.5	11.0	3.9	65.2	34.8	(253)	64.0	5.9	22.5	(253)	22.9	13.3	32.9	30.9	(249)	42	56	(259)

表Ⅲ-7

表Ⅲ-8

表Ⅲ-9

表Ⅲ-10

表Ⅲ-11

表Ⅲ-12

表Ⅲ-13

N	年令				性		職業(その他の無職・分類不能無答除く)					スポーツの愛好(Ⅰ)		スポーツの愛好(Ⅱ)				運動不足感		スポーツ消費		
	20	30	40	50	男	女	自	家	被	主	※	す	き	す	み	両	※	あ	な	支	支	
	代	代	代	代			営	族	雇	婦	(N)	き	い	る	る	方	(N)	り	し	出	出	
軽スポーツ型	132	8	41	27	24	40	60	14	9	57	20	(118)	82	17	31	27	42	(108)	63	34	51	43
野外スポーツ型	17	6	18	59	18	88	12	35	-	59	6	(17)	88	12	13	-	87	(15)	47	47	88	12
競技スポーツ型	50	22	56	20	2	56	44	7	13	70	11	(46)	96	2	19	-	79	(48)	48	48	84	16
複合スポーツ型	111	13	51	27	9	76	24	16	1	73	7	(108)	96	5	33	10	56	(106)	73	26	88	9
計	310	11.9	45.8	27.4	14.8	58.1	41.9	15.2	5.9	65.7	13.1	(289)	89.4	10.0	28.5	14.4	56.3	(277)	63.2	34.2	71.6	24.8

表Ⅲ-14

表Ⅲ-15

表Ⅲ-16

表Ⅲ-17

表Ⅲ-18

表Ⅲ-19

表Ⅲ-20

N	スポーツのための収入指向			職場の人間関係			仕事の疲労(肉体が精神か)		精神的疲労			学校卒業後のスポーツクラブ加入			健康・体力への配慮			健康法				
	ふ	思	ど	非	ま	よ	肉	精	ひ	少	余	現	過	未	常	と	あ	栄	睡	ス		
	や	わ	ち	常	ま	く	肉	神	ど	少	り	在	去	加	に	き	は	養	眠	ポ		
軽スポーツ型	132	27	27	39	24	52	5	31	57	21	47	22	4	15	67	39	46	16	49	39	13	(104)
野外スポーツ型	17	59	18	18	18	77	-	6	94	24	65	12	6	12	53	18	35	47	22	67	11	(9)
競技スポーツ型	50	44	34	22	30	54	-	30	56	18	60	12	52	14	24	14	58	28	29	34	37	(35)
複合スポーツ型	111	55	24	20	35	57	-	18	78	36	50	11	35	9	44	28	57	15	23	51	27	(89)
計	310	41.3	25.9	28.4	28.7	54.8	2.0	24.8	66.1	26.1	51.0	15.8	22.9	12.6	51.0	29.7	51.0	19.4	35.0	43.5	21.5	(237)

表Ⅲ-21

表Ⅲ-22

表Ⅲ-23

表Ⅲ-24

表Ⅲ-25

表Ⅲ-26

N	マス・メディアのスポーツ情報との接触								スポーツの話題 (同僚や近隣と)				スポーツ行事の 内容認知				スポーツ大会 (国体)の効果Ⅱ			気軽るに利用できる スポーツ施設			
	新聞				市町公報				い	と	ほ	全	低	中	高	※ (N)	以 前 よ り 多 く	変 化 な し	以 前 よ り 少 な く	あ	な	わ	
	い	と	ほ	全	い	と	ほ	全															
軽スポーツ型	132	32	55	11	2	39	48	11	2	13	61	17	5	37	45	14	(105)	8	84	1	81	11	6
野外スポーツ型	17	71	29	-	-	35	41	24	-	35	59	6	-	50	14	14	(14)	-	94	6	59	35	6
競技スポーツ型	50	46	50	4	-	50	50	-	-	26	60	14	-	19	48	33	(48)	26	74	-	94	2	2
複合スポーツ型	111	59	38	3	1	41	55	4	1	30	67	4	-	22	47	32	(92)	15	79	2	84	14	3
計	310	45.8	46.5	6.5	1.3	41.0	50.3	7.1	1.3	22.3	62.9	11.3	2.3	29.0	44.4	24.3	(249)	13.2	81.3	1.3	82.9	11.9	4.2

わち、年齢では、軽スポーツ型は20~40代の各年齢層にはほぼ平均的に分散しているが50代に特に多い。野外スポーツ型は20, 30代に少なく40代に多い。競技スポーツ型は20, 30代の若年層に、複合スポーツ型は各年齢層に平均的に分散しているが50代がやや少ない(表Ⅲ-7)。また、軽スポーツ型では女性が、野外、複合スポーツ型では男性が多いが、競技スポーツ型は男女差がそれほどみられない(表Ⅲ-8)。職業との関係では、軽スポーツ型は比較的分散しているが家族従事者や無職の主婦が多いこと、また野外スポーツ型は自営業、競技スポーツ型は家族従事者、複合スポーツ型は自営業及び被雇用者がいずれも多いことなどが特徴的である(表Ⅲ-9)。

つぎに意識項目では、「スポーツの愛好(I)(II)」「運動不足感」と関連し、スポーツが好きというものは競技=複合>野外>軽の順である。「好き」の内容をみると、スポーツを「する」方が好きは複合、軽スポーツ型に多く、「みる」のも「みる」のも好きは野外、競技スポーツ型に多い。ただ、軽スポーツ型では4人に1人は「みる」方が好きである(表Ⅲ-10, 11)。また、運動不足を感じずるものは複合、軽スポーツ型に多く、野外、競技スポーツ型に少ない(表Ⅲ-12)。しかし、類型I, IIでは関連していた「スポーツの効果に対する態度」はここでは関連がなく、「体力充実感」「学校時代の体育授業参加意欲」「仕事と余暇」「階層帰属意

識」などの項目とも関連していない。

・外的規制要素(項目)との関連

まず、物財体系の項目では、類型I, IIと同様「スポーツ消費」と関連し、さらに「スポーツのための収入指向」とも関連している。スポーツ支出をしたものは、複合=野外=競技スポーツ>軽スポーツ型となっている。また、スポーツをするために収入を現在よりも増やしたいとするものは、野外>複合>競技>軽スポーツ型の順である(表Ⅲ-13, 14)。しかし、類型I, IIと同様、「収入満足度」「住居安息度」「自家用車所有」などの項目とは関連しない。

社会体系の項目では、類型I, IIでは関連がみられなかった「職場の人間関係」「仕事の疲労(肉体か精神か)」と関連している。すなわち、職場の人間関係がよいとするものは、複合>競技>軽>野外スポーツ型の順であり、肉体的よりも精神的疲労の方が強いとするものは、野外>複合>軽=競技スポーツ型の順になっている(表Ⅲ-15, 16, 17)。また、「学校卒業後のスポーツクラブ加入」とも関連し、クラブ加入者は競技>複合>野外>軽スポーツ型の順である。とくに競技スポーツ型の場合半数以上の者が現在もスポーツクラブに加入している(表Ⅲ-18)。しかし、「家族型」とは類型IIと同様ここでも関連しない。

文化体系の項目では、「健康・体力への配慮」「健康法」の両項目と関連し、「常に注意を払って

総 括

いる」ものは軽>複合>野外>競技スポーツ型の順である(表Ⅲ-19)。また、健康法の内容は、軽スポーツ型では栄養・食事指向、野外、複合スポーツ型は睡眠・休養指向、競技スポーツ型はスポーツ・運動指向である(表Ⅲ-20)。マス・メディアのスポーツ情報との接触では、「新聞」「市町公報」と関連している。新聞をいつもよんでいるものは野外>複合>競技>軽スポーツ型の順、市町公報は競技>複合=軽>野外スポーツ型の順であり、軽、競技スポーツ型では新聞より市町公報、逆に、野外、複合スポーツ型では市町公報よりも新聞のスポーツ情報に関心がある(表Ⅲ-21, 22)。しかし、類型Ⅰ、Ⅱで関連していたテレビとは、ここでは関連しない。また、「職場の同僚や近隣の人々とのスポーツの話題」とも関連し、野外>複合>競技>軽スポーツ型の順である(表Ⅲ-23)。さらに、地域のスポーツ行事の認知についてみると、「行事内容の認知」と関連し、行事の具体的内容を多く知っているものは競技=複合>軽>野外スポーツ型の順である(表Ⅲ-24)。また、類型Ⅰ、Ⅱで関連しなかった「スポーツ大会(国体)の効果」とが関連し、大会(国体)が自分のスポーツ行動参与の機会を多くしたとするものは、競技>複合>軽>野外スポーツ型の順であり、とくに競技スポーツ型の4人に1人は大会(団体)によってスポーツ参与の機会が多くなったとこたえている(表Ⅲ-25)。

・環境項目との関連

「気軽に利用できるスポーツ施設」が関連し、それは競技>複合=軽>野外スポーツ型の順である(表Ⅲ-26)。しかし、類型Ⅰ、Ⅱで関連していた「主婦のスポーツ参加に対する理解Ⅰ(家族)」「主婦のスポーツ参加に対する理解(地域)」「スポーツ施設の種類」とはいずれも関連しない。

以上、調査結果にもとづいて、スポーツ行動と生活体系構成要素との相互関連をスポーツ行動の各タイプごとに分析を行い、それぞれについて個別的な検討を加えてきた。ここでは、さらに、これらの分析結果を総合的に検討することによって、生活体系構成要素がスポーツ行動のレベル(類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)とどのように関係しているかを考察することにする。最後に、スポーツ行動の各タイプについて、それぞれの生活体系の特徴を素描して、小稿のむすびとしたい。

1. 生活体系構成要素とスポーツ行動の3類型との関連についての総合的検討

小稿の目的のひとつはスポーツ行動の成立条件とスポーツ行動を規制する要因の具体的内容を把握することであったが、データを分析してみると、スポーツ行動のレベルによって、スポーツ行動が成立する状況やスポーツ行動を規制する要因に差異のあることが明らかになった。そこで、つぎにそれらの関係を総合的関連図として作成してみたのが図2である。以下、この図にもとづいて、生活体系構成要素とスポーツ行動のレベル(類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)との関係を総合的に考察する。

1) 状況枠とスポーツ行動の3類型との関係について

すでにみたように、本調査では、状況枠として、余暇時間、スポーツ施設、職場地点などの10個の項目を設定した。そのうち、スポーツ行動の成立にとって時間は不可欠の要因であり、従来のスポーツ行動に関する研究の多くは余暇をスポーツ活動の規定要因や促進要因としてあげている。しかし、本研究の場合、平日の余暇時間とその時間帯は類型Ⅰ(スポーツ行動のパターン:以下、パターンと略す)、類型Ⅱ(スポーツ行動の量:以下量と略す)、類型Ⅲ(スポーツ行動の選好:以下、選好と略す)を規定する要因とはなっておらず、休日の余暇時間が類型Ⅱ(量)と類型Ⅲ(選好)と関連し、休日の余暇時間帯が類型Ⅱ(量)と関連しているにすぎない。

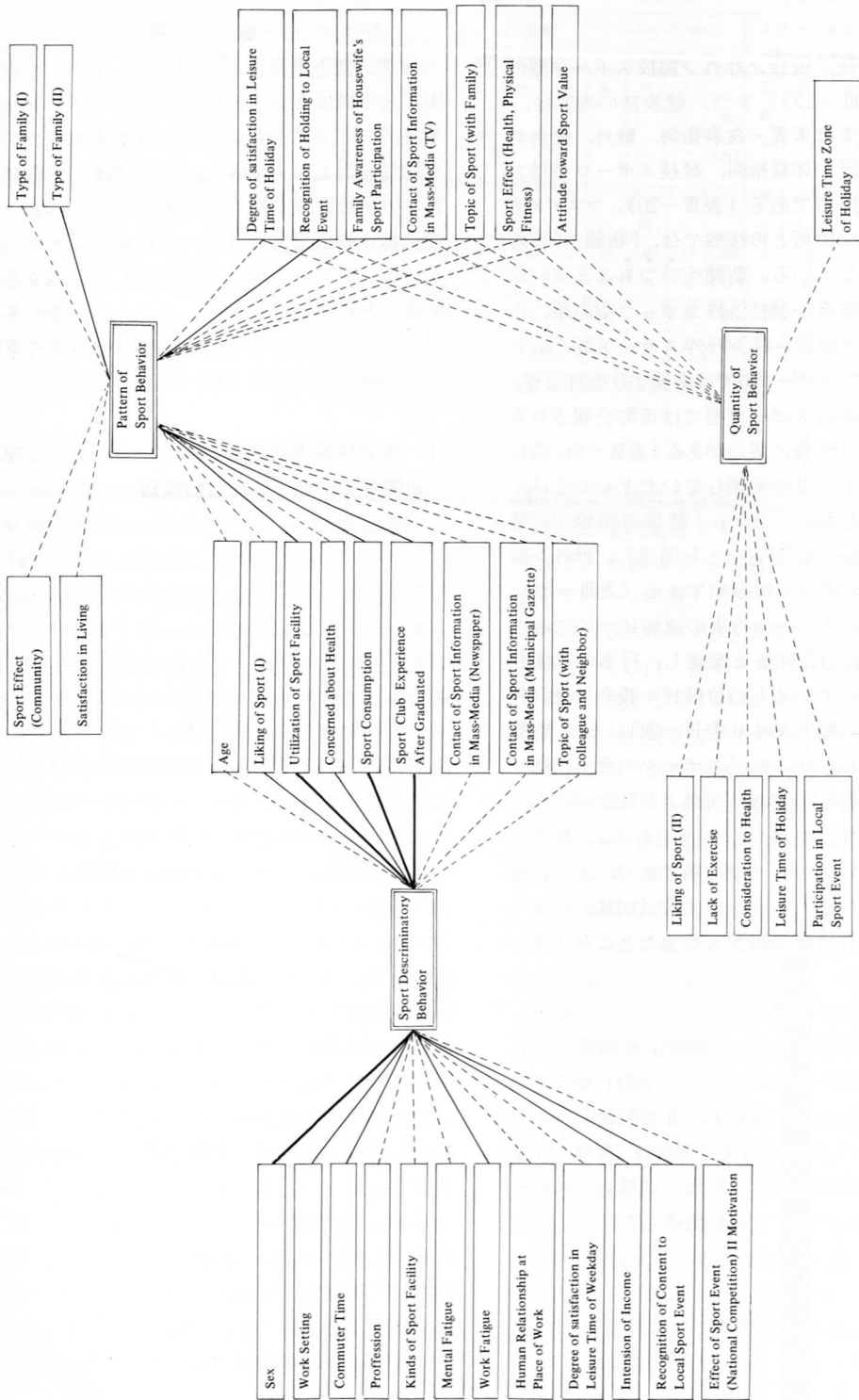


Figure. 2. The Related Diagram between Type of Sport Behavior and Constituent of Life System

$0.300 \leq Cr$
 $0.200 \leq Cr < 0.300$
 $Cr < 0.200$

また、心理的余暇時間ともいうべき余暇満足度は、平日の場合は類型Ⅲ（選好）と、休日の場合は類型Ⅰ（パターン）と類型Ⅱ（量）とに関連しているが、いずれもクラーメー関連係数の値が小さいことからみて、スポーツ行動に対する余暇時間の規制力は大きくないとみてよい。このことは、換言すれば、多くの人びとにとってスポーツをするための時間は、現在では比較的確保されやすい生活条件にあることを示すものである。

また、生活空間としての職場所在地や通勤時間は類型Ⅰ（パターン）、類型Ⅱ（量）とは関連しないが、類型Ⅲ（選好）と関連しており、その関連度も高い。これらの結果から、生活空間の広がりや一方では行動圏の拡大を促進し、野外や多様なスポーツ種目への参加を可能にしているのではないかと推測される。

スポーツ施設の利用は、類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのすべてと関連しており、さらに地域スポーツ行事の参加は類型Ⅱ（量）と類型Ⅲ（選好）とに関連している。このことから、地域社会におけるスポーツ施設やスポーツ行事は、人びとのスポーツ行動を規定しながら、個々人のスポーツ行動のシステム形成に有機的な関連をもっていると理解してよい。

2) 内的規制要素とスポーツ行動の3類型との関係について

まず、属性についてみる、年齢は類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのすべてと関連するが、性と職業（本人）は類型Ⅲ（選好）とのみ関連し、学歴と職業（夫）はどの類型とも関連しない。スポーツ行動に関する従来の研究は、性、学歴をスポーツ行動を規定する強い要因としてあげている。しかし、本調査では、性は類型Ⅲ（選好）とのみ関連し、男性は野外、複合スポーツ型、女性は軽、競技スポーツ型を指向する傾向がみられる。このことは、今日では、男性は野外、複合スポーツ型のような広域行動圏と多様なスポーツ種目を指向できる生活条件を具備しているが、女性の場合は身近なスポーツ施設やスポーツ行事への参加によってのみしか、そのスポーツ行動を成立させえない生活条件におかれていることを意味しているといえる。

学歴はスポーツ行動が生起する段階（実施—非実施）の規定要因とはなりえても、スポーツの大衆化が進行している今日の状況では、もはやスポーツ行動のパターン（類型Ⅰ）、スポーツ行動の量（類型Ⅱ）、スポーツ行動の選好（類型Ⅲ）などのスポーツ行動のレベルを規定する要因にはなりえないのではないかと考えられる。

運動不足感（量）と類型Ⅲ（選好）に関連する。一方、体力充実感（類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）のいずれとも関連しない。このことは、運動不足感がスポーツへの参加を促進し、スポーツ種目選択を決める要因となっていることを示すものであろう。また、これらのことから多くの人びとがスポーツを体力増強のためというよりも、むしろ運動不足の解消や健康の維持、病気の予防としてとらえている傾向をみとめることができよう。

生活意識項目についてみると、生活満足度は類型Ⅰ（パターン）とは関連するが、その他の生活意識項目は類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのいずれとも関連しない。しかし、経験的にみて、スポーツに生き甲斐を見出す人がみられるが、本データでみるかぎり、スポーツが生き甲斐と結びつく傾向はみられない。しかし、これらの項目の内的関連性や他の項目との関連性の検定によっては、スポーツ行動が特定の項目を媒体として、「生活のため」や「生き甲斐」と迂路的に関連していることも考えられる。この点については、さらに詳細な分析が必要であると考えられる。

3) 外的規制要素とスポーツ行動の3類型との関係について

・物財体系

まず、家計状況項目にあたるスポーツ消費およびスポーツのための収入指向の2項目についてみると、スポーツ消費は類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのすべてと強い関連をもち、スポーツのための収入指向は類型Ⅲ（選好）と関連する。このことは、スポーツ行動の相違によって消費行動の内容やシステムが変容することを意味すると考えてよい。

つぎに、生活手段項目にあたる住居安息度（居心地）と自家用車所有についてみることにする。これらは、仮説の段階においてスポーツ行動の成立

と関連性をもつと考えたが、両者とも類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのいずれとも関連しない。自家用車の所有がピクニックやハイキングなどの野外スポーツへの指向を促すといわれているが、本データの分析からは、そのような傾向はみられない。ひとつには、調査対象が地方の小都市と漁業中心の町であるため、ほとんどの人が持家で自家用車所有者であるという標本の性格によるものかも知れない。

・社会体系

社会体系の項目では、家庭における役割、職場生活、スポーツクラブの加入、の3つの観点から、スポーツ行動との関連を考察する。

家族型との関係を見ると、家族型Ⅰ、Ⅱは類型Ⅰ（パターン）とのみ関連し、類型Ⅱ（量）、類型Ⅲ（選好）とは関連しない。このことは、家族型の相違や学令前の子どもの有無などが、スポーツ行動の頻度やスポーツの内容を直接規定する要因となっていないことを示している。

職業生活との関係を見ると、類型Ⅰ（パターン）および類型Ⅱ（量）に関連をもつ項目は皆無である。したがって、仕事の内容が単調であるか変化があるが、職場での責任が重いか軽い、あるいは仕事の多忙さ、仕事による疲労の度合、疲労の質、仕事での能力の発揮、職場の人間関係などはスポーツ行動のパターン（類型Ⅰ）やスポーツ行動の量（類型Ⅱ）を規定する要因とはならない。ただ、類型Ⅲ（選好）との関連をみると、「職場の人間関係」と「仕事の疲労」の2項目が関連しているため、仕事における人間関係のよくないものや肉体より精神的疲労の強いものは、スポーツ行動として野外スポーツに指向する傾向があることがうかがわれる。

学校卒業後におけるスポーツクラブの加入は、類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのすべてと関連している。すなわち、スポーツクラブの加入は、スポーツ行動のパターン（類型Ⅰ）、スポーツ行動の量（類型Ⅱ）、スポーツ行動の選好（類型Ⅲ）を強く規定しており、このことから人びとのスポーツ行動は、クラブにおけるスポーツ活動を核とした1つの生活システムをつくりながら展開しているとみてよい。

・文化体系

文化体系の項目では、健康や体力への配慮、マス・メディアのスポーツ情報への接触、地域のスポーツ大会や行事の認知について考察する。

生活規範のなかでも、健康や体力に対する考え方や配慮の仕方が、個々人のスポーツ行動に深いかかわりをもつことはいうまでもない。本調査でも、健康や体力への配慮は、スポーツ行動の類型Ⅱ（量）、類型Ⅲ（選好）と関連している。すなわち、常に健康に心がけているものは週1回以上のスポーツを実施し、実施種目としては軽スポーツや複合スポーツを指向する傾向がある。

健康法は類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのすべてと関連する。このことは、日常型、季節型、競技スポーツ型、複合スポーツ型、週2回以上のスポーツ活動を実施しているものは、スポーツを健康や体力の維持・増進の手段として考える傾向が強いことを意味する。このように、健康や体力への配慮の相違や健康法としてスポーツや運動を導入しているか否かは、人びとのスポーツ行動の内容、すなわちスポーツ実施の頻度、種目の選択、スポーツ参加などの様式に差異を生み出していると考えてよい。

情報項目についてみると、新聞、TV、市町公報のいずれもが類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと関連している。つまり、マス・メディアのスポーツ情報との接触は、スポーツ行動のパターン（類型Ⅰ）、スポーツ行動の量（類型Ⅱ）、スポーツ行動の選好（類型Ⅲ）と相互規定的関係にあるといえる。また、家族や近隣、同僚とのスポーツ話題の交換についても、マス・メディアの場合とはほぼ同じことがいえる。地域スポーツ行事との関係では、行事開催の認知が類型Ⅰ（パターン）と類型Ⅱ（量）と関連しており、行事内容の認知は類型Ⅲ（選好）と関連している。このことは、地域スポーツ行事開催の認知が、スポーツ行動の促進的要因として関係しており、さらにスポーツ行事の内容を認知していることがスポーツ種目の選択に関係していることを示すものである。

4) 環境項目とスポーツ行動の3類型との関係について

環境項目では、スポーツ施設とスポーツ参加に対する人びとの理解の2点から考察する。

居住地でのスポーツ施設の有無は類型Ⅲ（選好）と関連するが、類型Ⅰ（パターン）、類型Ⅱ（量）とは関連しない。さらに、スポーツ施設の種類は類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、のいずれとも関連をもたない。したがって、スポーツ施設は、スポーツ行動のパターン（類型Ⅰ）やスポーツ行動の量（類型Ⅱ）を直接規制する要因とはなっていないといえる。これは、調査対象地区がスポーツが盛んで積極的に学校開放や夜間照明施設の設置を進めているために、施設不足という状況が身近かなものとして起りにくいという地域的条件下に起因しているかも知れない。

一方、心理的環境要因として人びとのスポーツ行動に深く関わっていると仮定した主婦のスポーツ参加に対する家族の理解ならびに地域の人びとの理解の2点についてみると、家族の理解は類型Ⅰ（パターン）と類型Ⅱ（量）とに関連しているが、地域の人びとの理解は類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのいずれとも関連しない。このことは、家族の理解がない場合には、季節的、日常的スポーツ活動に参加できる条件にとぼしく、かつ、スポーツ参加の頻度が低下することをあらわしているといえる。

2. スポーツ行動のタイプ別の生活特性

前項において、スポーツ行動のレベルは、それぞれ個有の生活構成要素によって規制されていることが明らかにされた。つぎに、これらの3種類のそれぞれから、各々2つの典型的タイプを選び、計6タイプについて、その生活特性を素描してみることとする。このことは、同時に、スポーツ行動を規定する生活体系を構造的に把握するための試みでもある。

1) 類型Ⅰ（スポーツ行動のパターン）

(1) 日常型

年齢や家族型の点からみると、比較的各年代に平均的に分散しているが、やや30代が多い。スポーツに対する愛好の程度や価値態度はいずれも好意的であり、かつ、マス・メディアによるスポーツ情報の接触に対しても積極的である。学校卒業後はスポーツクラブに加入したり、健康法としてスポーツをとり入れたりしながらスポーツ行動を展

開している。また、女性の場合、主婦のスポーツ参加に対する家族の理解があり、核家族でしかも末子が小学校以上の者に、このタイプを指向する者が多い。このように、スポーツに対する主体的要因と子育てが終ってスポーツをするために必要な客体的条件の確保との一致が日常的なスポーツ活動を可能にしているといえよう。

(2) 行事型

年齢と家族型の点からみると、40代で核家族より複合家族に多い。とくに女性では日常型と同様末子が小学校以上のものにこのタイプを指向するものが多い。休日の余暇満足度や生活満足度は低いが、新聞、テレビよりも公報のスポーツ情報への関心が強い。したがって、地域のスポーツ施設をよく利用し、地域のスポーツ行事開催を熟知している。健康法は睡眠・休養指向でスポーツ指向は少ない。スポーツの愛好とか主婦のスポーツ参加に対する家族の理解等を基盤に、地域や職場のスポーツ行事に参加することによってスポーツ行動を成立させているといえよう。

2) 類型Ⅱ（スポーツ行動の量）

(1) 週2回以上のスポーツ実施者（A型）

年齢的には各年代に平均的に分散している。スポーツに対する愛好度も高く、かつすることへの愛好が強いが、スポーツの価値態度は他のタイプに比して特に好意的であるとはいえない。運動不足感を感じている人はもっとも少ない。半数近くが休日に4時間以上の余暇をもち、しかもその時間帯は午後が多い。そのためか休日の余暇満足度はかなり高い。マス・メディアのスポーツ情報としては、公報との接触がもっとも強いが、その割には地域のスポーツ行事参加率は低い。しかし、地域のスポーツ施設利用回数も多く積極的にスポーツクラブに入っているものも多い。常日頃健康や体力に配慮しており、そのための健康法としてスポーツ指向者が多い。スポーツ行動を成立させるシステムが生活体系として確立されているとみてよい。

(2) 月1回程度以下のスポーツ実施者（D型）

年齢的には比較的20代と50代の若年層と高年齢層にこの型のものが多い。スポーツの愛好程度

は低く「きれい」もしくは「すきでもきれいでもない」が5人に1人の割合を占めている。また、スポーツの価値態度もあまり好意的でないうえ、余暇満足度も低い。健康や体力への配慮は低く、しかも健康法は睡眠・休養指向中心でありスポーツ指向者は少ない。地域のスポーツ行事開催の認知度も低いし、行事の参加者も少ない。マス・メディアのスポーツ情報接触度も低い。総じてスポーツに対する愛好、価値観、関心などが低く、内的にも外的にもスポーツ行動を顕在化させるだけの生活体系がまだ固定されていないといえる。

3) 類型Ⅲ (スポーツ行動の選好)

(1) 軽スポーツ型

全年令層に平均的に分散しているが、50代と無職や家事従事の女性のなかにこの型に属するものが比較的多い。居住地内に職場(仕事の間)をもち通勤時間も短い。スポーツの愛好度は低く、好きであっても「みる」方にかなり力点がある。地域のスポーツ施設を利用するより、家の庭や近くの空地、道路、公園等を利用して手軽な運動をしている。そのためもあってか日常スポーツをしている割に運動不足感がある。健康や体力についても常に注意しているが、健康法は栄養・食事指向中心でスポーツへの指向は弱い。マス・メディアのスポーツ情報との接触度は全体に低い。新聞よりは市町公報への関心がやや高い。地域のスポーツ行事への参加やスポーツクラブ加入はきわめて低い。したがって、スポーツのために支出することもないので、スポーツのための収入指向への意欲は低い。

(2) 競技スポーツ型

この型を指向するものは、男女とも20、30代の比較的若年層のサラリーマン(被雇用者)に多い。スポーツの愛好度はもっとも高く、とくに「する」のも「みる」のも好きなものが多い。健康や体力への配慮はそれほど高くはないが、健康法としてスポーツ指向のものが多いのが特徴である。休日の余暇時間も少なく平日の余暇満足度も低い。しかし、地域のスポーツ施設やスポーツ行事内容の認知度は高く、それらの利用度や参加率は高い。また、スポーツクラブ加入者も多い。そのためか

新聞より公報のスポーツ情報に関心が強い。また、スポーツ大会(国体など)がスポーツをはじめる動機づけとなっている人もかなりいる。

おわりに

はじめに述べた如く、それぞれの生活行動の間には有機的な関連があり、そこに一定のパターンができあがっているため、スポーツ行動も単発的な行動として発現し存続するのではなく、他の諸々の生活行動と関連しながら展開されているはずである。と同時に、生活行動を規制する要因も相互に有機的連関性をもちつつひとつのシステムをつくっているのであるから、あるスポーツ行動が発現し存続するためには、スポーツ行動が成立するためのひとつの規制要素のシステムができあがっていると考えるべき。したがって、スポーツ行動が成立するための生活体系を解明するには、まずスポーツ行動がどのような状況下で発現し存続するかを分析するとともに、スポーツ行動の規制要素の具体的内容を確定することが必要である。^{注6)}

また、種々様々の生活行動やスポーツ行動規制要素間のそれぞれ相互の関連性の分析等も必要であろう。

このように考えると、小稿はきわめて不備な点が多いといわざるを得ない。

しかし、前述した如く、生活体系構成要素をア・プリオリに選定したとはいえ、スポーツ行動が成立する状況やそれを規制する要因がスポーツ行動のレベルによって異なること。また、スポーツ行動のタイプ別にそれぞれの生活特性を提示し得たことは本研究のひとつの知見であろう。

いかなるスポーツ行動に、いかなる生活体系が存在するか、あるいは、いかなる生活体系に、いかなるスポーツ行動が成立するかを具体的、客観的に明らかにするには、スポーツ行動を規制する要因の詳細な検討とそれら諸要因間の相互関連の分析が不可欠である。これらの作業は今後の課題でもある。

付 記

本研究は、昭和51～53年度文部省科学研究費総合研究A:「コミュニティ・スポーツに関する社会学的研究——国民体育大会が地域住民のスポーツ活動におよぼした影響の追跡的研究——」(代表者 藤田匡肖)の研究の一部である。計算処理は名古屋大学大型計算機センターのFACOM230-60/75を利用しておこなった。

注1

スポーツ行動のレベルという用語には、つぎの2つの意味をもたせた。

スポーツ行動の特質を分析する場合は、さまざまな角度からのアプローチが考えられる。たとえば、スポーツの形態的特性からの分類であれ、スポーツの文化的特性からの分類であれ、それぞれの分類方法の違いによって、スポーツ行動を規定する要因は一定ではあり得ない。

本研究では、3つの分類基準を採用することによって、スポーツ行動を類型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに分けたが、その分類基準をスポーツ行動のレベルという用語で表現した。

他のひとつの意味としては、各類型内におけるスポーツ行動の階梯をあらわすものとして使用してある。

注2

これらの項目は2つ以上にまたがっている場合が多い。たとえば、「職業」という項目はパーソナリティの特性であると同時に、社会的役割とも関係があるし、さらに収入源として家計とも無関係ではないからである。

注3

月1回以下のスポーツ実施者は、この分類基準によっては、明確なタイプとして位置づけられないので不適当と考え除外した。

注4

スポーツの実施者、非実施者別の考察は後日発表する予定である。

注5

注1における第2の意味、すなわち、スポーツ行動の階梯を意味する。

注6

青井は生活体系の分析には、つぎの5つの分析が必要であると指摘している。

①状況分析。②規制要素分析。③相互関連分析、④産生投入分析。⑤効果分析(青井和夫、松原治郎、副田義也編:文献14, P147～148)

文 献

- 1) 荒井貞光, 小村堯, 杉山允宏, 松本純子, 松田泰定. スポーツ行動に関する実証的研究(1). 広島大学総合科学紀要 Ⅲ(1): 33～51, 1975.
- 2) 荒井貞光, 松田泰定. スポーツ行動に関する実証的研究(2). 体育学研究 22(3): 37～152, 1977.
- 3) 東川安雄, 荒井貞光, 松田泰定. スポーツ行動に関する実証的研究(3). 日本体育学会第27回大会号 P. 134, 1976.
- 4) 荒井貞光, 松田泰定, 東川安雄. スポーツ行動に関する実証的研究(4). 日本体育学会第28回大会号 P. 145, 1977.
- 5) 東川安雄, 荒井貞光, 松田泰定. スポーツ行動に関する実証的研究(5). 日本体育学会第29回大会号 P. 137, 1978.
- 6) 永吉宏英, 江橋慎四郎, 条野豊, 島崎仁. フィジカル・レクリエーション成立を促がす要因分析. レクリエーション研究 6: 29～37, 1977.
- 7) 池田勝, 江橋慎四郎, 永吉宏英. 勤労青少年のスポーツ実施を規定する要因の分析. 日本体育学会第26回大会号 P. 112, 1976.
- 8) 嘉戸修, スポーツ活動の多元クロス分析. 日本体育学会第26回大会号 P. 132, 1976.
- 9) 小椋博, 影山健. 労働要因がスポーツ参与に及ぼす影響の分析. 体育学研究 22(5): 311～319, 1977.
- 10) 丹羽勲昭, 長沢邦子. 女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討. 体育学研究 23(2): 109～119, 1978.
- 11) 山本清洋. スポーツ行動の概念構築のための基礎作業. 日本体育学会第25回大会号 P. 185, 1974.
- 12) 多々納秀雄. スポーツ行動分析の基礎視角. 九州大学体育学研究 5(3): 15～26, 1975.
- 13) 山本孟. スポーツ行動に関する認識方法試論. 日本体育学会第29回大会号 P. 54, 1978.
- 14) 青井和夫, 松原治郎, 副田義也編. 生活構造の理論. 有斐閣. P. 146, 1971.
- 15) 青井和夫, 松原次郎, 副田義也. 前掲書. P. 145
- 16) 松沢勝. 第2日本人の生活意識. 国民生活センター編. 至誠堂. P. 4, 1973.
- 17) 安田三郎. 社会統計学. 丸善. P. 54, 1969.

(1979年1月19日受付)

